

都市 80 歳高齢者における移動能力の障害とその後の医療費・介護サービス点数

—— 杉並区健康長寿モニター事業 ——

古谷野 亘¹⁾, 長田 齋²⁾, 安藤 雄一³⁾, 澤岡 詩野⁴⁾, 甲斐 一郎⁵⁾

1) 聖学院大学, 2) 女子栄養大学短期大学部, 3) 国立保健医療科学院, 4) ダイヤ高齢社会研究財団,
5) 東京大学

第 61 回日本老年社会学会大会一般報告, 2019.6.

【目的】

移動能力は生命予後と有意な関連を有することが知られている。本研究においては、後期高齢者の移動能力と医療費および介護費との関連について検討した。

【方法】

2012 年 4 月 1 日時点で満 80 歳であった東京都杉並区民の全員 3,812 人を対象として同年 9 月に郵送調査を実施した。郵送調査の回答者のうち個人情報利用に同意した 1,846 人を追跡対象者とし、2017 年 3 月まで追跡した。本報告においては、郵送調査で移動能力に障害がなかった者（障害老人の日常生活自立度判定基準で J1）と障害があった者（同 J2 以下）について、追跡期間中の死亡率、要介護・要支援認定率、1 ヶ月当たりの平均医療費と平均介護サービス点数を比較した。

本研究は聖学院大学研究倫理委員会の承認を得て実施された。

【結果】

郵送調査時に追跡対象者の 11.3%が移動能力の障害を有し、この割合に性差はなかった。要介護・要支援認定を受けていた者は 17.7%であった。

転出者を除いて比較したところ、男女とも障害のある者では死亡率が有意に高かった。郵送調査時に要介護・要支援認定を受けていなかった者の中でも、移動能力の障害を有する者では、その後の要支援・要介護認定率が高かった。

月平均医療費と平均介護サービス点数は、いずれも移動能力の障害を有する者で高かった。

【考察】

本研究の結果は、移動能力の障害が、生命予後のみならず、その後の医療費や介護費と関連していることを示した。これは、後期高齢期にいたるまで移動能力を維持することの重要性を示唆する知見である。本研究の追跡対象者には、調査開始時の 80 歳の杉並区民の中でも健康な人が多く含まれているので、結果の解釈には注意が必要である。

都市80歳高齢者における移動能力の障害と その後の医療費・介護サービス点数

— 杉並区健康長寿モニター事業 —

古谷野 亘¹⁾，長田 斎²⁾，安藤 雄一³⁾，澤岡 詩野⁴⁾，甲斐 一郎⁵⁾

1) 聖学院大学 2) 女子栄養大学短期大学部 3) 国立保健医療科学院

4) ダイヤ高齢社会研究財団 5) 東京大学

【目的】

後期高齢者の移動能力と、その後の医療費および介護費との関連について検討した。

【方法】

2012年4月1日時点で満80歳であった杉並区民の全員3,812人を対象として同年9月に郵送調査を実施した。郵送調査の回答者のうち個人情報利用に同意した1,846人を追跡対象者とし、2017年3月まで追跡した。

郵送調査で移動能力に障害がなかった者（障害老人の日常生活自立度判定基準で「J1」）と障害があった者（同「J2」以下）について、追跡期間中の死亡率、要介護・要支援認定率、1ヶ月当たりの平均医療費と平均介護サービス点数を比較した。

【結果】

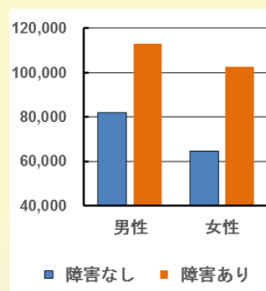
郵送調査時に追跡対象者の11.3%が移動能力の障害を有し、この割合に性差はなかった。転出者を除いて比較したところ、男女とも障害のある者では死亡率が有意に高かった。郵送調査時に要介護・要支援認定を受けていなかった者についてみると、移動能力の障害を有する者では、その後の要支援・要介護認定率が高かった。

月平均医療費と平均介護サービス点数は、移動能力の障害を有する者で高かった。

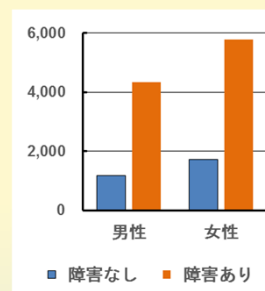
【考察】

本研究の結果は、移動能力の障害が、生命予後のみならず、その後の医療費や介護費と関連していることを示した。これは、後期高齢期にいたるまで移動能力を維持することの重要性を示唆する知見である。

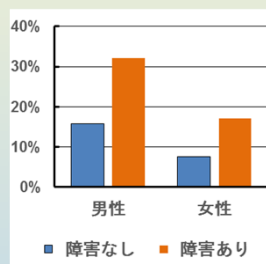
なお、本研究の追跡対象者には、調査開始時の80歳の杉並区民の中でも健康な人が多く含まれているので、結果の解釈には注意が必要である。



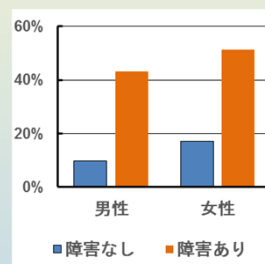
月平均総医療費 (円)



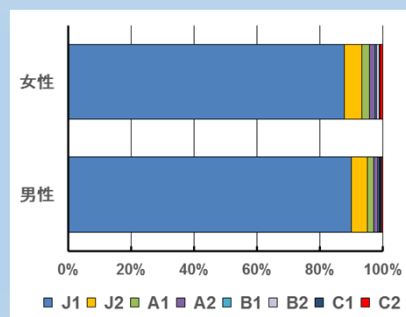
月平均介護サービス点数 (点)



追跡期間中の死亡率



追跡期間中の要介護・要支援認定率



追跡開始時の移動能力

